

研究テーマ	<p style="text-align: center;">[Ⅲ 自分らしさを表現する造形教育を考える]</p> <p>一人一人の「思い」を生かし、自分らしい表現を追究していく喜びを味わう美術科指導の在り方 ——中学3年生「思いを形に～やきものをつくろう～」の実践を通して——</p>
-------	--

小美玉市立美野里中学校 教諭 安藤 広恵

1 研究テーマについて

ものや情報に溢れている現代，生徒の様子を観察していると，様々な情報から影響を受けつつも鋭い造形感覚をもっているように感じられる。しかし，学年が上がるほど多くの生徒は造形感覚を発揮させる前に，自分にはつくれないとあきらめてしまい，自分がつくりたいものではなく，自分につくれるものに取り組む傾向がある。制作では技能面に対しても自信がなかったり，時間が足りないから終わらないだろうと断念したりするなど自分らしい表現をあきらめる様子がうかがえる。今回の研究テーマである「Ⅲ 自分らしさを表現する造形教育を考える」では，生徒の気持ちを前向きにするにはどうしたらよいか課題となった。生徒に意欲をもたせ，さらにそれが継続できるような実践をしたいと考えた。

自分らしい表現をしたいという思いを引き出すためには題材設定が大切であると考え。発達段階としては写実期にあたる年齢であり，1，2学年で行った「自然物の構成」や「自画像」の制作では写真や実物をじっくりと観察し，本物の色や形，そのイメージを表現しようと集中して取り組んでいた。つまり，自分らしい表現を引き出すためには，生徒自身がつくりたいものの形や色などのイメージを明確にもつことが大切である。さらに，実際に使ったり飾ったりして制作後の活用方法までイメージさせることで，より自分らしい表現を追究していく意欲につながると考える。そこで第3学年の最後の制作として題材「思いを形に～やきものをつくろう～」の実践から本テーマの研究に迫りたい。

自分らしい表現を生み出すためには，中学校学習指導要領解説美術編（以下，解説と記述）「A 表現」（2）ウにもあるように，美しさに視点を置いた造形感覚を発揮しながら，材料や用具の生かし方を含め，目的や機能などにより総合的にとらえて表現の構想を練る学習過程が必要である。解説「A 表現」（3）との関連を図り，材料や用具の特性を生かしながら，完成までのイメージをもたせる指導の手立てを考えていきたい。

2 研究の仮説

自分の表現したい思いやイメージを明確にすることができれば，発想を広げ，より自分らしい表現を根気強く追究していこうとする態度が養われるであろう。

3 テーマに迫るための手立て

（1）身近にある陶器を見つめ直す。

日常生活にはたくさんの陶器が使用されている。何気なく使用していることが多いが，実際に制作するにあたり，陶土でどのようなものができるのかを考えさせることで，制作への意欲につながると考えた。また，参考作品や制作上必要な情報になりそうな資料を用意したり，自主的な調べ活動を取り入れたりすることで現物の陶器をじっくり見たり触れたりしながら，フォルムの美しさや機能性に注目させていきたい。その際，在りきたりの形に終始することなく，世界に一つしかない自分だけの作品になるよう意識させたい。さらに制作工程などの資料を用意し，掲示することで完成

までの見直しをもてるようにする。

(2) 使用する人の気持ちや機能を追究する。

材料となる粘土の種類や量は決まっているが、一人一人の思いを実現していくために、つくるものやつくり方にはできるだけ制限を少なくし、表現したいことへの可能性を広げたいと考えた。「誰のためにつくりたいのか」「何をつくりたいのか」など一人一人の目的を明確にさせた上で、身近にあるやきものを実際に見て、触って観察させ、使いやすさや手の馴染みやすさなどの機能面、形の美しさなどのデザイン性を見つめ直し、使う人の気持ちを考えさせたい。表面的なデザイン（図柄）にばかり意識がいくと既製の商品と変わらない作品になりがちなので、奇抜な発想も含め、独自性を大切にしながら自分らしい表現の追究につなげていきたい。

(3) 完成までの見直しを具体化させる。

つくりたいものが決まっても、完成までの見通しが立たなければ計画を変更するか、自信がもてないまま制作に着手することになる。当初は試作をして粘土の質感や特性を確認してから完成予想図を描かせる予定だったが、発想をより広げるために完成予想図を描いてから試作をすることで、粘土の質感や特性を確認するだけでなく、握りやすさやデザイン性なども確認し、その上で完成予想図を修正させながら発想を広げていく。その際、机間指導をしながら制作の手順や本番までに必要な準備物などについても、個々に確認をしていきたい。

(4) 仲間から学ぶ場を設ける。

一人では発想が深まらなくとも、仲間の発想をヒントに発展させていくことや仲間のアドバイスによって新しい発想が生まれることも多い。また陶土を使つての制作では、陶土や道具の扱いなど互いに協力し合つて行くことによって、作品制作が効率化されたり、失敗を回避したりすることができると考え、グループ形態での制作とした。

4 実践例

(1) 題材名 「思いを形に～やきものをつくろう～」

(2) 題材の目標

使う人の気持ちや機能性、美しさを考えながらイメージをふくらませ、陶芸の基本的な技法を習得しながら、自分らしい表現を追究していく力を身に付ける。

(3) 題材について

本題材は、解説第2学年及び第3学年内容A表現(2)ウ「使用する者の気持ちや機能、夢や想像、造形的な美しさなどを総合的に考えながら、見直しをもって表現すること」に関連する。やきものは日常生活と密接に関わっており、つくりたいもののイメージがわかりやすい。また土のもつ軟らかさや自由自在に変化する特性から、形の多様性がねらえる素材だと考えた。土という触覚を楽しみながら、様々な形を形成すると同時に、自然の温かさを感じさせる素材でもある。

本校では窯がなくやきもの全行程を扱うことはできないが、幸い県を代表する伝統工芸である「笠間焼」が近くにあり、施釉焼成まで行ってもらえる窯元がある。さらに美術館との連携を考え、茨城

県陶芸美術館の貸し出し用教材セット「陶芸ボックス」の一部を借用し、用具の充実化や制作の効率化を図ることとした。この機会に笠間焼を含めた「やきものの特性や歴史」、茨城県ゆかりの陶芸家「板谷波山」や「松井康成」等についても学習したい。

本学級の生徒は、落ち着いた態度で授業に臨んでおり、黙々と制作に取り組む生徒が多い。生徒たちは中学校に入学してから様々な素材を体験してきたが、粘土を使った立体制作は初めてである。またアンケート調査により、ほとんどの生徒は幼児期に様々な粘土遊びを行っているが、小学校中学年以來、粘土には触れておらず、やきものの体験をしたことのない生徒が75%いる。粘土を敬遠する生徒もいるが、52%の生徒は「やきものをやってみたい」と答えていた。

意欲や基本的な技能に差は見られると思うが、一人一人の思いに寄り添い、制作工程や表現方法を工夫しながら制作意欲を高めたい。また義務教育最後の作品として愛着ある作品を完成させ、日常生活の中で実際に使ったり、飾ったりすることによって、卒業後も生活の中で美術を愛好し心潤う生活を創造しようとする意欲と態度につなげていきたい。

(4) 題材の評価基準

美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
制作工程を理解し、制作の手順を踏まえ、効率的に進んで制作しようとする。	機能性や美しさを考え、思いをふくらませながら制作の構想を練ることができる。	表現方法を工夫し、安全に留意しながら正しく用具を使用できる。	郷土の作家や伝統工芸の作品を味わい技術や美しさを感じとることができる。

(5) 指導と評価の計画（7時間扱い）

※○印は時数

時間	学習内容・活動	評価規準【評価方法】
第1次 ①	郷土の美術について知る。	<ul style="list-style-type: none"> 茨城ゆかりの郷土作家について興味をもつ。関【観察・ワークシート】 郷土の作家や伝統工芸の作品を味わい技術や美しさを感じとる。鑑【観察・ワークシート】
第2次 ②	やきものの制作方法を知り、試作を通して構想を練る。	<ul style="list-style-type: none"> 進んでアイデアを練ろうとする。関【観察・ワークシート】 機能性や美しさを考え、思いをふくらませながら制作の構想を練ることができる。想【観察・ワークシート】 やきものの種類や笠間焼きの制作工程、技法について理解する。技【ワークシート・試作品】
第3次 ③	完成予想図をもとに、制作を進める。 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> 制作工程を理解し、制作の手順を踏まえ効率的に進んで制作しようとする。関【観察・ワークシート】 安全に留意しながら正しく用具使い、表現方法を工夫した制作ができる。技【観察・作品】
第4次 ①	作品を鑑賞する。	<ul style="list-style-type: none"> 作品を完成させ、自己反省・相互評価することができる。関【観察・ワークシート】 友達の作品のよさを見つけることができる。鑑【観察・ワークシート】

(6) 本時の展開

◇目標 陶土の特性を理解し、自分のデザインに合わせて表現方法を工夫し、効率的に制作することができる。

◇準備・資料

陶土、陶芸ボックス（茨城県陶芸美術館製作貸し出し用教材キット、：粘土用ヘラセット、印花セット、）どべ、筆、型（茶筒、瓶など）

◇展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価 ○発問
<p>1 本時の学習内容・活動を確認し、学習の見通しをたてる。</p> <div data-bbox="159 481 710 582" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>使用する人の気持ちや使いやすさなどを考えたやきものを成型しよう。</p> </div> <p>2 4人グループになり、用具を準備して、各自の計画に基づいて制作をすすめる。</p> <div data-bbox="143 716 406 1008" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈制作注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ作り直さない。(固くなる) ・水浸しにしない ・塊は空洞を作る ・名前、印をつける </div> <div data-bbox="470 817 710 1052" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈成型方法の選択〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手びねり ・玉つくり ・ひもつくり ・板づくり </div> <div data-bbox="167 1321 454 1512" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈グループ学習〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・用具の使い方の確認 ・制作手順の確認 ・発想を広げる </div> <div data-bbox="279 1713 582 1948" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>デザイン・機能</p> <ul style="list-style-type: none"> ○誰のために ○使用目的 ○使いやすさ ○デザイン性 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の活動を振り返り、本時の学習のめあてを明確にし、これからの活動への思いがふくらむようにする。 ○自分のイメージするものに合うつくり方で成型してみよう。使う人の気持ちや使いやすさを考えながら完成させよう。 ・ワークシートの完成予想図はあらかじめチェックしておき、型が必要な生徒には事前に用意しておくように声をかけておくなど、各自のデザインに合った表現が可能になるように助言する。 ・制作しながら、最初の構想と違う作品になっていくこともよいことにするが、粘土が固くなりやすいため、作り直しは1, 2度程度にするようにする。 ・瓶の型や加飾用の抜き型などを必要とする生徒には、コーナーを設置し、必要な道具を使用できるようにしておく。 ・焼成すると15%くらい縮むことを再確認し、大きめに制作させる。また厚さを均一にしないと割れやすいことなど注意事項を黒板に掲示し、確認する。 ・生徒の活動を見守りながら、つくり方に応じて適切に用具を使用しているか確認する。 ・粘土が厚くなり過ぎないように、搔き出しベラで中を搔き取る場合は、指先の感覚なども頼りに厚さを均等にできるようにする。 ・取っ手や飾りが取れないよう傷を付け、ドベをしっかりと塗り、粘土をならすようにする。 ・制作工程が理解できていない生徒には、構想を確認し、つくり方のポイントや必要な道具について助言をする。 ○粘土を使用しない時やつくりかけを置いておくときは、ぬれ雑巾をかけて乾燥を防ごう。 ・釉薬のつかない底面に名前等を掘るようにする。 ・完成後、乾燥棚におき乾燥させる。 ○班ごとに協力し合って用具を片づけよう。粘土が付いているものは洗い、へらなどは数を確認して所定の場所に戻そう。 <div data-bbox="734 1915 1428 2016" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>技 安全に留意しながら正しく用具使い、表現方法を工夫した制作ができる。(観察・作品)</p> </div>

<p>3 後片付けと本時のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力する。 ・学習カードの記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導から、表現にあった道具を安全に正しく使用できるように助言する。 ・ワークシートに本時の活動を反省させ、焼成完成時期等について知らせることで、本時の活動意欲を次回につなげたい。
---	---

5 成果と課題

(1) 成果

▽美野里中学校 3年 2組 33名

	H24.10.3	H25.3.8	
やきもの（陶芸）をしてみたいと思いますか？（10月）	はい 18人 どちらでも 7人 いいえ 8人	はい 31人 どちらでも 2人 いいえ 0人	↑
やきもの（陶芸）をして良かったと思いますか？（3月）	はい 9人 どちらでも 13人 いいえ 11人	はい 29人 どちらでも 4人 いいえ 0人	↑
作品づくりの時、デザインのイメージが浮かびやすいですか？（10月）	はい 9人 どちらでも 13人 いいえ 11人	はい 29人 どちらでも 4人 いいえ 0人	↑
やきもの制作ではデザインのイメージがもてましたか？（3月）	はい 9人 どちらでも 13人 いいえ 11人	はい 29人 どちらでも 4人 いいえ 0人	↑
いつも作りたいイメージ通りの作品ができますか。（10月）	できる 5人 大体できる 11人 どちらでも 8人 あまりできない 6人 できない 3人	できた 5人 大体できた 10人 どちらでも 11人 あまりできない 7人 できなかった 1人	→
イメージ通りのやきものことができましたか。（3月）	できる 5人 大体できる 11人 どちらでも 8人 あまりできない 6人 できない 3人	できた 5人 大体できた 10人 どちらでも 11人 あまりできない 7人 できなかった 1人	→
いつも制作には満足していますか。（10月）	している 6人 大体している 11人 どちらでも 7人 あまりしていない 6人 していない 3人	している 13人 大体している 10人 どちらでも 8人 あまりしていない 1人 していない 1人	↑
やきもの作りにおいて満足する制作ができましたか。（3月）	している 6人 大体している 11人 どちらでも 7人 あまりしていない 6人 していない 3人	している 13人 大体している 10人 どちらでも 8人 あまりしていない 1人 していない 1人	↑

上記の表は、学習に関するアンケートをもとに検証授業前と検証授業後の生徒の意識の変容をまとめたものである。やきものの授業前では「手が汚れる」や「自信がない」等の理由から、やきもの制作に関心のない生徒も多く、「やきもの制作をしてみたい」生徒は18人で全体の52%だったが、授業後は31人と全体の97%の生徒が「制作して良かった」という感想であった。

身近にある陶器についてじっくり考えさせ、実物に触れ、大きさや重さ、持ちやすさなどを確認したことが完成作品へのイメージを明確にすることにつながったと考えられる。授業で観察した後も、家にあるマグカップなどを観察し、取手のデザインをアイデアに生かしたり、使う人に合う大きさや持ちやすさを確認してきたりする生徒もおり、制作意欲や自分らしい表現につながったといえる。



持ちやすさの追究

また「誰のためにつくるのか」を考えさせることで、「何をつくと喜ぶのか」「その人に合った大きさは」「好みのデザインは」など使う側の気持ちを考える場面が見られた。両親のために日頃の感謝の気持ちを込めて作品の構想を練ったり、自分や家族のために好みのデザインを追究していったり、つくりたいものが具体的になっていった。完成予想図を描く段階では、使いやすさを重視した器をつくらうとしていたが何の変哲もないデザインでは面白みがないため、何度もアイデアを練り、制作前日までオリジナルのデザインを工夫する生徒もいた。

試作では、見通しを立てるため、手びねり、玉づくり、ひもづくり、板づくりの4つの成型方法につ

いて参考資料や実演を通して説明し、つくりたいものに合う制作方法を選択して小作品をつくった。1時間という短時間で制作のため、未完成も多く、予想していた成型方法では制作しづらいことが分かった。試作での失敗をもとに家からイメージに合ったグラスを探して制作当日持参してきたり、寸法を計り自分で型紙を作ってきたりする生徒もでてきた。陶土は油粘土と違い、粘土の水分が飛びやすく硬くなったり、ひび割れたりすることも理解が深まった。

4人グループでの制作を行い、制作の遅れがちな生徒も、仲間から学びながら制作することができた。グループの中で、どべの使い方を教え合ったり、友達に見本をつくってもらい完成できたという生徒もいた。「友達に助けてもらったおかげで完成できた。」という感想もあった。中には完成予想図は描いたものの本当につくりたいイメージが明確になっておらず（自分らしい作品を追究しきれず）、友達の影響を受け友達と同じ形の作品をつくったり、技術不足でつぶれたコップのような作品になってしまった生徒もいた。



上記の意識調査から完成イメージが明確になった生徒が87%に対し、イメージ通りに制作できたという生徒は45%しかいなかった。しかし70%の生徒は制作に満足しており、97%の生徒は「やきもの制作をしてよかった」と答えている。以上の結果と生徒の様子から、生徒たちは高い目標をもち、意欲的に制作し自分らしい表現を追究していたが、経験や技術等が不足していることもあり、イメージ通りの作品にならなかった生徒も多かったのではないかと予想される。形が歪んでしまったり、失敗して形を変更したりする生徒も、一生懸命制作したことで制作に対しては満足感をもっている。最後の美術の授業では「中学校卒業後も美術の授業で学んだことを生かして制作活動等をしてみたいか」という質問に83%の生徒が「してみたい」と答えており、「美術を愛好する心情を深め、心豊かな生活を創造していく意欲と態度を高める」（解説 第2学年及び3学年の目標）ことにつながった。

(2) 課題

本題材の活動を通して、生徒は自分の表現したい思いやイメージを明確にして発想を広げ、自分らしい表現を追究しながら作る喜びを味わうことができた。しかし、表現したいことを思うがままに造形として表していくためには、発想を広げるための十分な時間をとったり、表現するための技能を身につけたりすることが必要である。本題材では試作品づくりを行ったが、時間が短かったため多くの制作方法がある中、試すことができたのは1人あたり1つ、多くても2つの方法までであり、自分にふさわしい制作方法を見つけられなかった。制作の見通しがもてきれなかったことがイメージ通りの作品ができなかったことにもつながっている。限られた時間の中で、表現するための技能を身につけるかを課題とし、今後の研究を深めていきたい。

